

天使たちの課外活動10

レティシアの奇跡

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 鈴木理華

天使たちの課外活動10

レティシアの奇跡

ヴァンツァー・ファロット●プライツィヒ高校二年A組所属
相当複雑な事情で、元凄腕の暗殺者

ランドルフ・カーター●通称ランディ、二年A組の生徒 元
有名子役

ベアテ・ノルマン●二年A組の生徒

スティーブ・バリー●二年A組の生徒、舞台上で右足を骨折

マイケル・ケント●通称ミック、二年A組の生徒

ローズ・アボット●二年A組の生徒で級議員

◎『^{オーロラ}極光城の魔法使い』キャラクター

アウレーリオ アウローラ

ランディ・スター●ランドルフ・カーターの芸名

ハドリー・クイン●ランドルフ・カーターの父の芸名

ロジャー・カーター●ランドルフ・カーターの父

レジーナ・ウッド●ランドルフ・カーターの祖母の芸名

ジンジャー・ブレッド●大女優

ニック・ハリソン●舞台『レベッカ』のプロデューサー

ユージン・ラングフォード●プライツィヒ高校三年首席にして、
級議長（他校における生徒会長）

シドニー・エイブリー●プライツィヒ高校三年 演劇部の部
長

ジョン・ホプキンス●通称ホップス、シドニーの元同級生

ケヴィン・トーマス●聖グロリアス病院の入院患者

エリック・コール●聖グロリアス病院の入院患者

トミー・フライ●聖グロリアス病院の入院患者

ジョン・タッカー●聖グロリアス病院の入院患者

ケント・ヘイワード●聖グロリアス病院の入院患者、ケヴィン
と同室

登場人物

リィ (エディ/ヴィッキー/王妃) ●アイクライン校の中学二年生 かなり複雑な理由で、一流の戦士の腕と魂を持っている

シェラ・ファロット ●アイクライン校中学二年生 とても複雑な理由で暗殺技術は超一流

ルーファス・ラヴィー (ルーファ/ルウ) ●サフノスク大学構造学科所属 実は宇宙創造にかかわる人外生命体

ライジャ・ストーク・サリザン ●惑星トゥルークの僧侶 ルウの友人

レティシア・ファロット (レティー/レット) ●チェーサー高校二年生、セム大学医学部にも所属 ものすごく複雑な理由で元暗殺者一族の最優秀暗殺者

ジョン・チャンピオン ●通称チャンプ、セム大医学部の専門授業科目 (セミナー) の班長

マージョリー・プライム ●通称マージ、セミナーを受講する女学生

チェルシー・レイン ●セミナーを受講する女学生

サンドラ・ビショップ ●通称サンディ、セミナーを受講する女学生

ブルース・バトラー ●セミナーを受講する男子学生

クリフォード・ラッシュ ●セミナーを受講する男子学生

ギルバート・ケイヒル ●セミナーを受講する男子学生

チャド・クロウリー ●セミナーを受講する男子学生

エイデン・パーカー ●セム大の名物教授、セミナーの主宰者

◎『新春の朝』キャラクター

少年 親類の夫婦 (ジャック) 両親と妹 (ジェニー)

少女 (マリア)

エイミー・スワン●聖グロリアス病院の入院患者
レベッカ・ヒル●通称ベッキー、聖グロリアス病院の看護師
モナ●聖グロリアス病院の看護師
アリス・デイモン●通称ビッグママ、聖グロリアス病院の看護師長

ヘルマン・シュミット●教授、医学界のスーパースター
ベンソン●ヘルマン・シュミットの助手
デューク●猟奇殺人の関係者
ニコラ●猟奇殺人の関係者

セオドア●ジョン・チャンピオンの養父
ブライズ●ジョン・チャンピオンの養母
ウィリー●ジョン・チャンピオンの弟
メロディ●ジョン・チャンピオンの妹
ウィリアム・チャンピオン●通称ビル、ジョン・チャンピオンの実父
カレン●旧姓はダーリング、ジョン・チャンピオンの実母
ルーシー●ジョン・チャンピオンの実妹
マイク・エアハート●ジョン・チャンピオンの家族の事故の関係者

レオン・ヴォルフ●百年に一人の天才と言われるヴァイオリニスト
アドレイヤ・サリス・ゴオラン●ライジャ・ストーク・サリザンの師
ジルダ・アルヴィン・ドルガン●ヴィルジニエ僧院の大師
ディオルク・ボリス・ドルガン●メルボルト僧院の大師
アレフ・サーナン・ドルガン●メルボルト僧院きっての弦の名手にして楽聖
ロムリス夫妻●ライジャ・ストーク・サリザンの両親

1

校門を指す人の流れに身を任せながら、リイは感心したように言った。

「あいつ、ちゃんと演技できるんだな」

昨日に続いて今日も訪れたブライツイヒ高等学校、その学園祭最終日が終わろうとしている。

横を歩いていたらルウも頷いている。

「かつこよかったよね。女の子は誰でも彼に夢中になるんじゃない?」

二人が話しているのは今見てきたヴァンツァーの芝居のことだ。騎士に扮したヴァンツァーは日頃の無愛想が嘘のような笑顔と気品のある物腰、何より生来の美貌で女性客を虜にしていた。

リイが笑って言う。

「だけど、本人は自分を好きじゃない女の子にしか好意を持ってないんだろう?」

ルウも苦笑している。

「贅沢な悩みだよねえ……」

シエラは一人、複雑な顔だった。

こちらへ近づいてくる人影を見つけて、その顔が決定的に苦い顔になる。

レティシアだった。

「よ、またしてもおそろいじゃん。昨日も来たのに、熱心だよな」

リイが笑って言い返す。

「おまえが言うか?」

シエラは、そつと独り言ちている。

「何の因果で、二日続けておまえの顔を見なくてはならないんだ……」

「聞こえてるぜ、お嬢ちゃん」

レティシアはおもしろそうに笑っていたが、突然、その彼に声が掛かった。

「レットじゃないか！」

「あれえ、班長^{はんちやう}」

レティシアは本当に意外そうな声を発した。

それは相手も同様だったらしい。

「ここで会うとは思わなかったぞ」

笑顔でレティシアに話しかけてきたのは、立派な体つきの青年だった。金髪碧眼^{きんぱつへきがん}、なかなかの色男だ。

身体が大きいので大人びて見えるが、眼の輝きは子どものように無邪気^{むじゃぎ}で潑刺^{はつちやく}としている。

レティシアの傍^{そば}に立っていたリイとシエラを見て、ますます楽しそうな笑顔で言ってきた。

「おお、美少女だな！ ガールフレンドか？」

二人ともすかさず反論した。

「それを言うなら美少年」

「この男とは友達ですらありません」

リイはともかくシエラは氷のような声だったのに、少しも気にしていないらしい。

眼を丸くして、ますます楽しげな笑い声を立てた。

「美少年か！ それは失敬した」

レティシアは青年を紹介した。

「こいつはジョン。ジョン・チャンピオン。俺より三年も上だけど、セム大の同級生で専門授業科目^{せんもんじゆぎく}の班長^{はんちやう}な。こっちは——つとヴィッキーでいいのか？ それと、お嬢ちゃん。そっちは二人の保護者」

ヴィッキーというのはリイの『対人間用』の名前である。顔いて、気^きのよさそうな大男^{おおおとこ}に会釈^{えいせき}したが、シエラは憤然^{ふんぜん}とした口調で訂正した。

「シエラ・ファロットです」

人の紹介を『お嬢ちゃん』で済ませるなど怒^{いか}りを込めて名乗ったわけだが、ジョンは別のことが気^きになったらしい。真顔^{まけん}でレティシアに問^とい質^たした。

「この子は美少年なんだろう？ それなのに、なぜお嬢ちゃんなんだ？」

「だってよ。そいつ、見てみるよ。どう間違^{まちが}っても『お坊ちゃん』って感じじゃないだろう」

「なるほど。——きみと同じ名字だが、親戚か？」



「赤の他人」

シエラとレティシアの声が見事に揃い、シエラはその後に「です！」と力強く付け加えた。

漫才のようなやりとりである。

ルウが笑いを噛み殺しながら名乗った。

「ぼくはルーファス・ラヴィー。よろしく」

ジョンの青い眼がまじまじとルウを見つめてくる。初対面の相手に対して、いささか無遠慮には違いないが、よく輝く瞳に悪意は微塵も感じられない。

少なくともルウは不快には思わなかった。

相手もルウに好感を持ったらしい。

屈託のない笑顔で尋ねてきた。

「こちらはまた性別不詳だが、美青年か？」

「だよ。一応男。そういうジョンも男前だよね」

ルウも笑って言う。

ジョンは再びレティシアに視線を戻した。

底抜けの明るさの中にも優しさの籠もる眼差しだ。

「どうしてここに？」

「知り合いがいるんだよ。班長は？」

「母校だ」

「——この卒業生？」

レティシアは眼を丸くした。

ジョンは何がそんなに楽しいのか、高らかに笑い声を上げている。

「きみは友達が少ないんじゃないかと、実は密かに心配していたが、杞憂だったようだな」

「そうかあ？ 俺、人付き合いはいいほうだぜ」

「いいや。それなら班の顔ぶれとも、もっと親密につきあってくれてもいいだろう」

「冷たくした覚えはねえんだけど」

「そうだな。俺も冷たくされた覚えはない」

「何だよそれ……」

「だが、せっかく同じ班になったのだから、もっと親しくなりたい！」

「……力説するなって」

金銀黒の三人は生温かい眼でその様子を見ていた。

同じ班とはいえ、年上にいじられるレティシアが新鮮だったというのもあるが、それ以前に――。

ジョンの態度から、彼がレティシアに抱いている感情がどんなものか、容易に想像できたからだ。

三人は無言で眼と眼を見交わしたのである。

(この人、レティーを可愛いと思ってるよな?)

(勘違いも甚だしい。それは小動物ではありません。

『さわるな危険』の劇物です)

(見た目だけなら小さくて弱そうだもんねえ……)

この『弱そう』は間違っても『弱々しい』という意味ではない。たとえるなら愛玩用の小型犬を表現する時に使う『弱い』だ。

本人(犬)は至って健康で、元氣よく走り回っていても、もともと身体が小さく、骨格も華奢なので、気をつけていないと、すぐ怪我をする。

小柄なレティシアはジョンと並ぶと、頭一つ分も背丈が違う。身体の厚みも幅も半分くらい、は言い過ぎとしても、体格に差がありすぎる。

現に今のジョンは、使役作業用の立派な大型犬が、やんちゃな小型犬を見守っているような感すらある。「俺は大きいお兄ちゃんだからな。この小さい子が無茶しないように、ちゃんと見ていないと!」

いや、その子、間違っても弱くないから……。

きみたち大型犬が団体で襲いかかったとしても、一瞬で負けるのは団体さんのほうだから……。

という三人の心境はジョンには伝わらない。

気の毒そうな眼で見られていることには気づかず、

ジョンは三人に対して、親切に言ってきた。

「セム大の大学祭にもぜひ来てくれ。俺たちの班はレットが主役の劇をやるんだ」

既にその件について三人に相談していたことなど微塵も感じさせず、レティシアは大げさに頷いた。

「そうなんだよ。せっかく主役に抜擢されたのに、俺、演技が下手くそでさあ。今のところ、駄目出しばかり食らってるんだ」

「何を言う。まだ始めたばかりじゃないか。大丈夫。

きみならできるとも。——それじゃあ、また明日」

「ああ、明日な」

ジョンは最後まで明るい笑顔で離れて行った。

レイシアはやれやれと肩をすくめている。

ルウがちよっぴり同情する口調で尋ねた。

「今の人が専門授業科目の班長？」

「そ。あのとおり、悪いやつじゃないんだが……」

リイが慎重に感想を述べる。

「いい人なのはわかるけど、ちよつと暑苦しいかも
しれないな」

「ちよつとどころの騒ぎじゃねえつて。ありゃあ、

究極の根明人間だ。あの調子で、まあ、めげない、

折れない、譲らない」

ルウは励ますように言った。

「話のわからない人じゃないとは思うけど」

「いいや、せいもかなり怪しいぜ」

レイシアは珍しく顔をしかめている。

「本人に悪気がないだけに質が悪くてよ。人の話を

聞いてねえなつて、よく思うぜ」

シエラが慎重に口を開いた。

「あの人、将来は診療医を目指しているとしたら、

小児科は避けたほうが無難かもしれない」

「お、鋭いじゃねえか、お嬢ちゃん」

リイは首を捻っている。

「子どもには懐かれるんじゃないか？」

シエラは複雑な顔で首を振った。

「元気な子どもならそうです。ああいう陽気な人が
好きでしょうが、弱っている子どもですよ？」

ルウも苦笑している。

「ちよつとした風邪くらいならまだいいよ。だけど、

重い病気や怪我をして気持ち減入っている時に、

あの勢いで迫ってこられたら、きついかもね」

レイシアはおもむろに頷いた。

「この間の訪問実習がまさにそうだったんだよ」

「え？ きみたち、もう患者さんを診るの？」

「まさか。研修医としての実習じゃねえよ。第一、

俺たちはまだ予科生だ。医師免許めんきょもないんだから、診療行為はできねえって」

レティシアは少々複雑な学生生活を送っている。彼はチェーサー高校の二年生であると同時にセム大学の医学専攻科の二年生でもある。

正しくは、実際の身分は高校生で、医学専攻科に『間借り』をしているという状態だ。

普通なら、こんな学習形態は認められない。

レティシアの場合は、彼が一種の避難民であるということが考慮されたのだ。

彼は自分の意思で留学りゅうがくしてきたわけではない。

天涯孤獨てんやこどくの身で、育成支援団体に保護される形で、連邦大学惑星テイラフ・ホーレンに來た（という設定になっている）。

本人は医療を学びたいと強く希望きぼうしている。

加えてかなりの辺境出身で、中央宇宙の常識には極めて疎ととい。

そこで、本人の学習意欲は認めつつ、同じ年頃の生徒たちとの交流も必要だろうという連邦大学委員

会の判断で、間借りが決まったのだ。

もつとも、医学専攻科には違いなくとも、最初の二年は予備科という扱いだ。その間に、みっちり基礎医学を学ぶ。次に本科が二年、この間に診療に進むか、研究に進むかを選択する。さらに二年間の専攻科を修めた後、医学大学院に進まないと、医師免許は取れない。

この間、授業についていけなかったら、容赦ようしゃなくふるい落とされる。

レティシアは無事に予科の一年を終えて、二年に進級したのだから、優秀には違いない。

リイが尋ねた。

「医師免許がないのに実習って、何をやるんだ？」

「主な目的は見学だな。医者が患者にどんなふうに接しているのか、現場の様子を実際に見て、知識を得るんだと。——あとは患者の話し相手もやった」

「医者じゃないのに？」

「病気になるた人間はやっぱり、普通とはちよつと

精神状態が違ってくるからな。——教授が言うには、「きみたちは学生で医者でも何でも無い。はつきり言えば、医者になるかもしれないただの素人だが、それがあゝの意味、好都合」なんだとよ」

話はまだ続きそうだったので、四人は校門を出たところにあつたカフェに腰を落ち着けた。

シエラはものすごく苦い顔だったが、相方たちに合せて、大人しく座っている。

「お腹空いたから軽く食べていこう」

そう言つてリイが注文したのは、ハンバーガーにサンドイッチ、フライドチキンである。

レティシアは呆れて言つた。

「それで軽いわけ？」

「一応」

ルウはお茶の他にドーナツを頼んでいた。

シエラはお茶のみ、レティシアは珈琲を頼んで、教授の言葉を皆に伝えた。

「患者つてのはただでさえ立場が弱い存在なんだと。

そりゃあ中には無闇やたらに医者に噛みついてくる怪物患者もいるが、変な話、そういうのはまだ

元気な患者の部類で、本当に深刻な状態になると、医者に萎縮して、うまく話のできない患者もいる。

だから先入観なしで、親身になつて患者の話を聞く。今の治療方針に満足しているのか、何か不安に思うことや疑問があるか、あるとしたらどんなことか、聞いてこいつてわけさ」

リイが疑わしそくに尋ねる。

「カウンセリングつてことか？」

「俺たちは無資格だからなあ。厳密には違つけど、

まあ、そんな感じじゃね？」

シエラは苦虫を噛み潰したような顔で呟いた。

「……病人が暗殺者に身上相談？」

ルウは苦笑している。

「聞いてもらうだけで安心する人もいると思うよ。『病は気から』なんていう言葉もあるくらいだから。

患者さんが不安いっばいな精神状態で過ごすのと、

比較的安定している状態で過ごすことを比べたら、安定しているほうがいいに決まつてる」

レティシアは大きく頷いた。

「うちの教授の言い分がまさにそれなんだ」

エイデン・パーカー教授はセム大の名物教授で、

『患部を診る前に患者を診ろ』という方針だそうだ。

「怪我や病気になった患者はどういう心境なのか、どういう立場の存在なのか、そこるところを、まず理解しろつてわけ。患者と信頼関係を築かなくては治療はできない——とも言つてたな」

こう聞くとかなりの人情家のようなのだが、パーカー教授はある意味、非常にドライでもあった。

ただし——と受講生を見渡して続けたそうだ。

「現実的に一人の患者に掛けられる時間は限られる。速攻で患者に信頼されるように心がけるんだ」

受講生はレティシアを含めて九人。

『見るからに真面目そうな優等生』の女学生が手を上げて質問する。

「患者に信頼されるようになるには、どんな方法が効果的ですか？」

「いい質問だ。ミス・プライム。——同時に難しい質問でもある。わたしからの助言としては接客業のバイトをすることを勧めます」

学生たちはきよとんとなった。

「接客……ですか？」

「そうだ。飲食でも、小売りでもいいが、なるべく多くの客と接し、客の嗜好しこうが反映されるものがいいだろう。相對した客がどんな性格の人間か、どんなものを好むのか、瞬時に見抜く訓練になる」

学生たちは面食らつて顔を見合わせた。

「瞬時になんて、無理ですよ」

「わたしたちは特異能力者じゃありません」

教授は笑つて言い返した。

「客の心を読めと言うつもりはない。だが、現実的に客には歴然とした好みがある。初対面でも親しげに話しかけてくる店員に対して『友達みたいで何でも

相談できそう』と好感を覚える客もいれば、『接客業なのに馴れ馴れしい』と嫌悪する客もいる。この第一印象がたいせつなんだ。これが悪いと、その後、挽回するのは至難の業だ』

ここでレティシアが発言した。

「それって、患者にも『こんな医者がいい』って、好みがあるってことですか？」

「そのとおりだ。ミスタ・ファロット」

教授は頷いて、別の女学生に質問した。

「ミス・レイン。きみは子どもの頃から今日まで、

どんな医者にかかってきたか、覚えているかね？」

『愛嬌のある丸顔』の女学生は戸惑い顔になった。

「えっと、いろんな人がいましたけど」

「具体的には？ どの医師が印象に残っている？」

「優しかった人ですかね、やっぱり……」

「きみはどうかな？ ミス・ビシヨップ」

「ちよっと『お高くとまった』感じのする女学生は、

昂然と頭を上げて答えた。

「わたしなら、医師の人柄よりも能力を重視します。外科なら特に。手術経験も成功率も、今なら簡単に調べられるんですから」

「外科以外の医師は？ 優秀かどうか、どうやって判断するのかね？」

「診療医の評価も記録に残ります」

「では、患者が閲覧できるその評価は誰がする？」

同僚の医師か？ 違うね。確かに同僚の医師や看護

師らによる評価もあるが、そうした資料は内部に留

まり、患者には公開されない。患者が見られるのは

実際に医師と接した他の患者たちが下す評価だ」

女学生は言葉に詰まり、代わりに『色白で身体の

大きい、もっさりした感じ』の男子学生が発言した。

「そうは言っても、患者は医療の素人です。医師の

能力の善し悪しなど、わからないのでは？」

「そのとおりだ。ミスタ・バトラー」

と教授は言った。

「素人だからこそ、専門家の視点からすると『そん

なことですか？」と驚くような基準で医師の評価をする。

十人の患者がいたら、十通りの『理想の医者』が
 いると思いたまえ。ミス・レインのように優しそうな
 医者を好む患者が多いのは確かだが、逆にいかにも
 気むずかしそうな、權威的に専門用語を並べ立てる
 医者に頼もしさを感じて信頼する患者もいる」

この言葉を聞いて、レイは不思議そうに言った。

「変わった趣味だな」

レイシアが笑つて首を振る。

「それがそうでもない。特に社会的地位の高い男や、
 年配の女には、よくこの傾向が見られるんだと」

「へえ……」

教授は続けて言ったそうだ。

「そのくらい、第一印象というものは軽視できない。
 患者にとつて、医師の技倆や経験はその後なんだ」
 本当に医学部？ と首を傾げたくなるほど体格の
 立派な『運動選手のような』男子学生が発言する。

「患者の心証を害するなということでしょうか？」

医療とは無関係な事柄に思えますが」

美男ではあるものの表情が硬く、小さな子どもが
 泣き出しそうな迫力の『真っ黒に日焼けした』男子
 学生も仏頂面^{ぶつちようづら}で反論した。

「納得できません。患者の心理状態を把握するのは
 看護師の担当業務のほうです」

「確かに、医療界にはそういう見解もある。しかし、
 ミスタ・ラツシュ、ミスタ・ケイヒル。質問するが、
 実際に患者を治療するのは誰だ？ 看護師かね？」

色黒の学生が苦虫を噛み潰したような顔で言った。

「医師です」

「そうだ。もし、きみが診療医の道を選ぶのなら、
 いやでも患者という『人間』と相対することになる。

——患者にも患部にも、患者の人生にも興味はない。
 ただ病理組織や医学的資料^{データ}に集中し、没頭したいと
 いうのであれば、わたしはきみに診療医は勧めない。
 研究医を目指すのが、きみ自身と患者のためだ」

ここまでの経緯を聞いて、ルウは尋ねた。

「パーカー教授は何が専門なの？」

「医者専門の精神科」

「なるほど……」

「この科目を取ったのは、こつちでの医者つてのは
 どういう立場なのかと思つたからさ。——俺のいた
 ところじゃあ、神さまか妖術師だったからな」

教授は学生たちに、『医師としての心構え』とは
 何か、医師はどういう立ち位置で患者に臨むべきか、
 いわば精神的な部分を考えさせようとしている。

「医師は患部を、看護師は患者を診る。医療現場の
 その風潮は、医師が激務であることにも原因がある。
 現実に、一人の患者にそれほど時間は掛けられない。
 しかし、わたしなら、信頼できない医師に担当して
 もらいたいとは思わない。何より、患者には医師を
 選ぶ権利がある。圧倒的医師不足で、患者に選択の
 余地がなかった——もしくは難しかった旧時代なら
 ともかく、現代のきみたちが診療に当たるためには、
 まず患者に選ばれる必要があるんだ」

教授は学生たちを見渡して続けた。

「指導する立場として率直な意見を述べるとしよう。
 一人の学生を一人の医師に育てるには、たいへんな
 時間と労力が掛かる。きみたちにとっては、莫大な
 学費も掛かる。そこまでの労力を費やして、晴れて
 医師免許を取得して、臨床研修医として働き始めた
 後になって、本人に医師としての適性がなかったと
 判明するのは悲惨だ。我々にとつても、きみたちに
 とつてもだ。もつと早くわかつていれば、他の道を
 選ぶこともできたはずだからな」

学生たちはちよつと動揺して、互いの顔を見た。
 『奇天烈な服装の無精髭を生やした』学生が訊く。
 「そんなことつて、あるんですか？」

「今ではほほえない、ミスタ・クロウリー。なぜなら、
 学業の成績と等しく、適性検査に力を入れるように
 なったからだ」

学生たちは無意識に胸を張った。

自分たちは今まさに、それを試されているからだ。

もつさりした色白の男子学生が再び発言する。

「教授は第一印象と言いましたけど、ほくだったら、そんなあやふやなものは信じません。仮に、患者が医療方針や治療法に不安を覚えたとしたら、それを補うのは、それこそ看護師の領分のはずです」

「一緒にされては困る、ミスタ・バトラー。患者の心のケアは確かに看護師の重要な仕事の一つだが、わたしはきみたちにそんなものは求めていない」

ならば、何を要求されているのか？

無言の問いを顔中に浮かべる学生たちに、教授はおもむろに言ったのだ。

「初対面で患者に好印象を抱かせることだ」

学生たちは困惑を隠せなかった。

教授は続けて言う。

「断っておくが、患者と仲よくしろと言うつもりはない。きみたちは彼らの友人でもなければ恋人でもない。きみたち自身を『理解してもらおう』必要もない。『わかりあう』必要もない。要点はただ一つ。

彼らの望む医師の姿を、彼らの眼に見せるんだ」

レティシアが再び発言した。

「えーと、それって、言葉は悪いですけど、『俺はとつても優秀な、いい医者だぞー』ってふりをして、患者を騙せってことですか？」

パーカー教授はにやりと笑った。

「その表現は首肯しがたいな、ミスタ・ファロット。印象をよくすると言ってもらいたい」

「……同じじゃないんですか？」

と、不満を訴えたのはサンドラ・ビシヨップ。

レティシア曰く『気位の高いお嬢』だそうだ。

ここで彼は班の全員の説明をした。

「サンドラの親が何をやってるかは知らないけど、ただの成金じゃなくて、上流階級の出だと思っぜ。

マージョリー・プライムも同じ『良家の令嬢』って感じだけど、タイプが全然違う」

ルウが首を傾げる。

「どっちもお嬢さまなのに？」

「サンドラは、なんて言うか、ひらひらのドレスに扇子を持って『おほほ』ってやるのが似合う感じな。マージは化粧も服装も一見すると地味なんだけどよ。身のこなしがきれいで、地味に見える服も持ち物も、みんな質のいいものばかり使ってる」

眼に見えるようだった。納得して、さらに尋ねる。

「もう一人の女の子は？」

「チエルシー・レイン。ありゃあ元気な仔馬だな。

何にでも興味津々で明るい」

男子学生はジョンの他に、ブルース・バトラー、クリフォード・ラツシュ、ギルバート・ケイヒル、チャド・クロウリー。

「ブルースはちよつと太めで、頭の固い優等生って感じかな。クリフは天然で、ギルは強面、チャドはちやらい」

なかなか個性的な顔ぶれである。

ルウは、以前のレティシアの言葉を思い出して、確認してみた。

「で、男の子はみんな大きいんだよね？」

「おう。一番でかいクリフなんか百九十超えてるぜ。他の連中もみんな百八十超えだな」

リイが呆れたように指摘する。

「その中にレティーが一人混ざったら、そりゃあ、可愛く見えてもおかしくないか……」

シエラはますます苦い顔である。

パーカー教授はこの講義の最後に言ったそうだ。

「近々、きみたちには実習に行ってもらおう。患者と直に接し、医療現場を観察するのが主な目的だが、きみたち自身の適性を見るためでもある」

その実習はセム大と提携している総合病院で行い、入院患者の中でも、比較的状态の良い患者に協力をお願いして、話し相手を務める手はずになっている。短い時間で、可能な限り、患者の精神状態を把握するようにというのだが、性格のきついサンドラや無愛想なギルはあからさまに難色を示した。

「失礼ですが、解剖実習や手術の見学ならともかく、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。